主日礼拝
２０２３年7月２３日（日）
題　「奉仕する女性たち」
テキスト：ルカによる福音書８章１～３節

　皆さま、おはようございます。
青空が広がり、夏の到来を感じます。洲本に来て驚いたことの一つは、散歩に出てぐるっと四方を見回すと、ぐるっと空が見えることでした。空に包み込まれるようでうれしく思いました。先日、岡山県の倉敷市で働いていた頃に知り合いになった、昔洲本で牧師をしておられた牧師の大村裕康牧師が天に召されたことを知り驚きました。主の慰めと平安をお祈りしました。
　さて、今日の聖書個所は短い個所で、小見出しに「◆婦人たち、奉仕する」とあります。婦人・女性と奉仕をつなげることは、今の時代少し違うと思う人も増えて来ているのだと思います。
どこの教会でも教会の役員は今でも男性が多いようです。そんな中、洲本教会は、役員に女性が多いことはバランスとしても良い事ではないかと思っています。
　今から約２０００年前、主イエスが地上を生きておられた時代、イエスが弟子として招いた人たちは１２人で、ほとんどがガリヤラの湖で漁を生業とする漁師たちで、全員男性でした。
　しかしイエスの神の国の宣教活動が進んで行く中で、実は多くの女性たちが、活動を支えていたのです。今日の聖書個所から学びたいと思います。
◆婦人たち、奉仕する
　1:すぐその後、イエスは神の国を宣べ伝え、その福音を告げ知らせな
　　がら、町や村を巡って旅を続けられた。十二人も一緒だった。
「1:すぐその後、」とは、ファリサイ派のシモンの家で、香油を壺からイエスに注いだ、当時は罪深いと見なされていた女をイエスが癒された後のこととなります。
　主イエスの活動の目的は、神の国を宣べ伝えることでありました。
神とは、ご存知のように天と地の創り主のことです。そして今も、わたしたち人間の肉眼の目では見ることはできませんが、聖なる霊として、信仰と希望と愛、慰めと励ましを与えてくださる方として日常の中で働いておられるのです。そして、やがていつの日が、この世界を新たに作り変えてくださる方なのです。そのように信じられているのです。神の国とは、場所を表している言葉というよりも、関係性を表している言葉だと言えるでしょう。神さはわたしを、わた

したちを愛してくださる方である、というように、神さまと私、私たちという関係を表すのです。
つまり、「イエスは神の国を宣べ伝える」とは、イエスは徹頭徹尾、神は人間を被造物を愛しておられるということ、大切に思っておられるという関係を大切にする方なのだということを、自分のことば、たとえ話や十字架に至るまでの生き方で教えてくださったのです。ですから、そのことを聞き知ったわたしたちも神を愛し、人を大切にすることが求められているのです。
身の回りの家族を始め、つながりのある人、たとえ今日始めて出会った人でも敬意を持って接するのです。これが聖書に書いてある、主イエスの教えてくださった生き方なのです。
イエスは、約２０００年前、この世に生まれ、言葉と行いを持って神の国を宣べ伝え、人々に神を愛し、人を愛するようにとユダヤの地をナザレの村やガリラヤ地方を巡り、自ら選び招かれた１２人の弟子たちと共に、町や村を巡って旅を続けられたのです。これが主イエスの宣教活動です。

　その宣教の旅のメンバーには、女性たちもいたのです。２節には、「2:悪霊を追い出して病気をいやしていただいた何人かの婦人たち、すなわち、七つの悪霊を追い出していただいたマグダラの女と呼ばれるマリア、」とあります。

　まずマグダラの女と呼ばれるマリアが出ています。
「マグダラ」とは地名で、ガリラヤ湖の東側の湖沿いにある小さな町です。このマグダラのマリアのことは、
「七つの悪霊を追い出していただいた」とあります。７というう数字は、完全数で「満たされている、多い」という意味や、悪い意味では、悪い力に完全に支配されている状態とも受けとめることができると思います。しかし、悪く、不自由で辛い状態の中でイエスに出会い、解放され、心の自由を得て、救われた女性たちが多くいたのです。彼女たちもイエスに従って生きて行った人たちなのです。過去においても現在においても起こり続けている解放の出来事と言えるでしょう。

　ちなみにマグダラのマリアという人は、イエスさまの生涯を記した４つの福音書、マタイ、マルコ、ルカ、ヨハネ福音書のすべてに記されている有名な女性です。イエス・キリストが十字架にかけられるのを見守り、イエスが埋葬されるのを見、そしてイエスが復活された朝、墓の方を見ていた人物として重要なイエスの復活の証人となった人です。西洋の西方教会、カトリック教会の伝

統では、マグダラ・マリアは「罪深い女」と伝えられています。
イエスによって悪霊から解放され救われてイエスに最後まで従って行った人の一人です。ちなみに２０世に入ってからのこと、考古学の発展の成果によるのか、「マリアによる福音書」という断片の古文書も発見されています。
イエスの働きを支えた重要な女性であったのだと思われます。
マグダラのマリアについては、西方教会や東方教会地域にいろんな伝説や、有名な絵画が多数残されているのです。

また続いて、３節には、
「 3:ヘロデの家令クザの妻ヨハナ、それにスサンナ、そのほか多くの婦人たちも一緒であった。彼女たちは、自分の持ち物を出し合って、一行に奉仕していた。」とあります。
「ヘロデの家令クザの妻ヨハナ」とは、あまりなじみがないのですが、この場合ヘロデとは、イエスが生まれた時のヘロデ大王の息子であるヘロデ・アンティパスのことだといわれます。ヘロデ・アンティパスはヘロデ大王の死後、ガリラヤ地方の領主になっていたのです。
その ヘロデ・アンティパスの執事をしていたクサという人の妻で、その名がヨハナです。このヨハナは、当時としてはかなり社会的地位の高い人物の妻です。
またスサンナという名前の女性は、この個所にだけ出てきており、どのような女性かは不明のようです。
こういう人たちもイエス・キリストの働きに賛同していたということです。
今回の聖書の学びでイエスの周りには、社会的に貧しい人たちだけが集まっていたのではなく、いろんな社会的対場の異なった人たちもイエスの宣教働きに支援していたということに気づかされて驚くと共に感謝しています。
　イエスと共に歩いた人々、女性たち、社会的な地位にかかわらず、苦労と悩みをかかえ弱さや汚れを抱えて生きていた人々であったのです。
神はすべての人の神であり、御子イエスはすべての人の心を
受けとめ神の愛を届け続けられた方なのです。ですから多く悩める人たちが
イエスの言葉と行いによって救われたのです。彼女たちは、イエスと出会った人たちは、自分の持ち物を出し合って、一行に奉仕していた、とあります。
この「自分の持ち物を出し合う」とは、義務でも、誰からの命令でもなく、自分を良く見せようとする気持からでもなく、愛なる神によって与えられた自由な意思、自由な心、自分の意思で行われた奉仕だったのです。「彼女たちは、自分の持ち物を出し合って、一行に奉仕していた。」とあります。働きには、困難なこともあったかもしれませんが、この姿に和やかな、自由なすがすがしさを

感じます。今日の聖書の個所は短い個所ですが、
イエスの宣教の初めの頃に、このような人たちがいたことは大きな意味あることだったと思うのです。わたしたちも、一人一人の働きがあったし、今もあることを覚えておきたいと思わされます。
　みなさまの上に主の平安を祈ります。　共に黙想しましょう。